



今年も鬼は来ます

園長 野中 泉

「先生のところは、今年も節分に鬼は来ますか?」。1月にあった町内の園長会議で、突然となりに座った園長先生からそう尋ねられました。「ええ、来ますよ。コロナも一定落ち着いていますし」と、感染防止の観点で心配されていると思い込んで答えた私に対し、その園長先生はこう続けました。「ほら、昨今、いろいろと難しいでしょ。このご時世では、何をしても虐待って言われそう。うちは、今年はいちばん脅しすぎたり、連れ去るのはやめておこうかと保育士とも話してるんですよ」。

いわゆる節分の『鬼論争』は、今年だけでなく近年はいろいろなところで繰り返されています。保育園や幼稚園で「鬼が来ると脅すのは虐待ではないか」というような意見は今にはじまったことではありません。保護者の反応も様々です。「思い切り泣かせてください」という親もいれば、「怖がらせたくない」という親もいます。

もちろん、私も頭ごなしに押さえつけたり、恐怖だけで脅して言うことを聞かせるような育児も保育も間違っていると常々思っていますし、もし、保育園での節分が、怖がらせることが「手段」ではなく「目的」になってしまっていたとしたら、それは、虐待といわれても仕方がないことです。

ただ、その上で冒頭の園長先生の発言は「子どもたちに何を体験させるのか」という視点は皆無で、ただただ世間にどう見られるかであったことに、保育現場が今陥っているいびつさを垣間見るようで、それこそ、とても怖いと感じました。また、ネットなどで繰り返されている「鬼論争」を読んでいても「なんのために」という目的が抜け落ちて、「手段」ばかりが論じられているような違和感に陥ってしまいます。

「節分」という文字からもわかるように、この日は季節をわける節目の日。旧暦では一年のはじまりの日です。一年のはじまりに「悪いものが家の中にはいりませんように」「病気をしませんように」「良いことがありますように」と願って豆をまきます。「鬼」は世の中にある悪いもの、怖いもの、そして自分自身の心に棲む悪い心の象徴です。子どもたちは、安心できる大人の傍らの安全な場所で「怖い」をしっかりと疑似体験します。小さな赤ちゃんたちは保育士と一緒に遠くから鬼を見せるだけですが、少し大きくなると鬼は近くにやってきて、時には友だちや保育士を連れ去ろうとします。最初はひたすら泣いて立ち尽くすだけの子どもたちが、保育士や大きい子どもたちに励まされて、泣き叫びながらも勇気を振り絞って豆を投げつけると、鬼たちはちゃんと痛がります。そして最後には必ず連れ去られた仲間も取り返せて鬼は去っていきます。この過程が大切なのです。ひとりで鬼に立ち向かう勇気を出す子どももいれば、友だちと手を握りあって、やっと勇気を出す子どももいます。今年も勇気を出せないで終わる子どももいます。いずれにしても、しっかりと「怖い」鬼がやってくるからこそ、子どもたちはほんとうに「怖いこと」への※畏怖の念を知り、またそれに立ち向かう「強さ」も養っていきけるのです。

節分だけでなく、日本古来の昔話やわらべうたには、現代の私たちには「怖い」「残酷すぎる」と感じるものも少なくありません。この原稿を書きながら、遠野のわらべうた伝承の第一人者安倍やエさんがこんなふうにお話をされていたことを思い出しました。「遠野では口うるさい忠告よりも、『語り』や、『わらべうた』が道徳や、礼儀作法を身に付けさせ、自分の身を守る教えだった。たとえば『ちよつ ちよつ あわわ かえぐり かえぐり とつとめ』のわらべうたの意味は、何でもひかえめに、ものはいわず、耳をかつぼじて聞き、目を大きくあけて見る、という一生大事な教え。人さらいなどにあわないように世の中には怖いことがいっぱいあると教える、大人達の導き方でもあったのよ。わらべうたの多くは、大人が子どもたちの体に優しく触ったり、膝に抱きかかえながら歌います。温かなぬくもりの中で幼子に「怖さの疑似体験」をさせてやる、そんな教えや伝承を日本人は古来から大事にしてきたのですね。今年も、アトムには怖い怖い鬼がきます。子どもたちがどんな姿を見せてくれるか楽しみです。

※畏怖（いふ）・・・「おそれおののくこと」。神仏や自然など、人間の力ではどうにもならない圧倒的な力を持っているものに対して使われます。ただ恐怖を感じているのではなく、恐れの中にも尊敬や崇拝の気持ちが含まれています。